

セミナー3

『ソネッツ』解釈の展望

コーディネイター： 郷 健治 (帝京大学教授)
メンバー： 阿部 曜子 (津田塾大学准教授)
大矢 玲子 (慶應義塾大学教授)
廣田 篤彦 (京都大学准教授)
コメンテーター： 高田 康成 (東京大学教授)

SHAKE-SPEARES SONNETS (1609) の 154 のソネッツをどう理解すべきか? というシェイクスピア研究最大の難問の一つに、「同性婚」が英米できわめて大きな政治・社会的争点となっている現在、5人のセミナーのメンバーが、それぞれの学問的な関心からアプローチし、新たな展望を模索することを目的として企画したセミナーです。以下はそれぞれのメンバーの報告のタイトルと概要です。

断片化されるテキストソネット連作と *sententiae*

阿部曜子

本発表では、コモンプレイス・ブックに体现されるような断片的な読み書きの習慣を背景に『ソネット集』を論じる可能性について考察した。ソネット連作と *commonplacing* の関連はこれまであまり着目されてこなかったが、*Belvedere* のような *sententia* の寄せ集め集や、ワトソン等の連作に見られる *gnomic pointing* (*sententia* を示す記号)、ダニエルが論じる短詩と *sententia* の関わりなどから、書き手、読み手の双方において、ソネットが断片的な読みの対象として認識されていたことは十分に推察できる。

sententia およびその近接概念の *maxim*, *adage*, *proverb* 等の重要な特徴として、当時の修辞学においては *trope* に分類され、「意味の置き換え」にその本質がある、潜在的に謎を含んだ表現形態である点が挙げられる。つまり *sententia* は解釈を経て初めてその意味を発揮するもので、ゆえに、*sententia* が提示する普遍的な命題や教訓の、個別の具体例に対する適用が常に問題となる。

例えばワトソンの連作では、語り手が自身の経験を通して得た恋の教訓が読者にも適用可能であると説くことによって、宮廷的な恋愛と人文主義的な教訓という対立する価値観の摺り合わせが試みられるが、この構図は、頭書き等も活用して曖昧な解釈を排除した、安定した *sententia* 運用に支えられている。一方で、ドレイトンやシェイクスピアの連作では、ことわざや教訓の適用困難が強調され、一人称的な経験から説得力のある形で普遍化ができない様子、また時には教訓が経験を歪曲する図式が見られる。このことは、エリザベス朝からジェームズ朝へと社会状況が変化する中で、ソネット連作の制作と受容が、安定した意味付与が期待できない場へと移ったことを示唆する。以上より、作中の *sententia*

分析が、初期近代の社会における恋愛詩の意味づけを考察する上でも有効であると期待できよう。

伝記批評と伝記：『ソネット集』と『イン・メモリアム』をめぐって

大矢玲子

本研究は、アルフレッド・テニソンが、親友アーサー・ハラムの追悼詩集『イン・メモリアム』(1850)を創作するにあたり『ソネット集』を範としたこと、また当時の『イン・メモリアム』批評が『ソネット集』をしばしば援用したことに注目して、ヴィクトリア朝における自伝的文学と、『ソネット集』の伝記批評との関わりを探るものである。『イン・メモリアム』に表現された、夭折の美青年アーサー・ハラムに対するテニソンの追慕と、『ソネット集』の詩人が若き貴公子に捧げた愛情の、類似と相違をめぐる文学的、倫理的見地からの同時代論争が、アーサーの父ヘンリー・ハラムが編んだ文学史(*Introduction to the Literature of Europe*, 1938-9)、テニソンの長男ハラム・テニソンが著した回顧録(*Alfred Lord Tennyson: A Memoir*, 1897)、またテニソン家、ハラム家を取りまいていた数多の文人、芸術家たちが書き残した伝記、回想、書簡、文芸評論の分析を通して明らかにされた。また文学作品を作者の人生の直接的な反映と見做す伝記批評に対し、テニソン自身は強く反発していたにも関わらず、彼の、またシェイクスピアの、同性愛的欲望の問題が、20世紀以降の『イン・メモリアム』と『ソネット集』の重要な批評テーマとなったことの、皮肉なめぐり合わせが指摘された。

初期近代における神話解釈と『ソネッツ』解釈の展望

廣田篤彦

本ペーパーでは、ソネット 119 番におけるセイレンへのいささか特殊な言及が、初期近代イングランドにおけるセイレン神話の伝統にどのように位置づけられるかを探ることで、神話を手掛かりとした『ソネッツ』解釈の展望の一端を提示した。ソネット 119 番には *siren tears* という句が現れる。この句を含む第一 *quatrain* には *Barnabe Barnes* の *Parthenophil and Parthenophe* のソネット 49 番と共通する語が使われているが、シェイクスピアは、*Barnes* とは異なり、セイレンと涙を直接結び付け、これを幻覚剤または毒薬として扱っている。元来、セイレンの恐ろしさは、その全てを忘れさせる美しい歌声にあり、毒薬は直接関係しない。一方、*Michael Drayton* の *Ideas Mirrour* の *Amour* 30 においては、ヘビとしての *siren* が、空涙を流す *crocodile*、目から毒を発する *cockatrice/basilisk* と並んで言及されており、*siren*, *tears*, *poison* が同一の女性の属性として言及されている。さらに、初期近代において、しばしばセイレンが魔女キルケの侍女として考えられるようになっていたことは、セイレンと毒薬の親近性を示唆するものとなっている。「セイレンの涙」という言い方は古典古代のセイレン像にはないものであるが、神話解釈の伝統を考慮に入れながら同時代のソネットと比較しながら検討すると、この句と共通するイメージの断片は随

所に見ることができる。この例を含めて、神話の受容と変容の伝統の中に『ソネツ』を位置づける解釈には更なる発展の余地があるように思われる。

SHAKE-SPEARES SONNETS の 1609 年初版 Quarto の出版事情再考

郷 健治

本発表では、*SHAKE-SPEARES SONNETS* の 1609 年初版 quarto (Q) が、シェイクスピア自身が出版するつもりで執筆し出版させたもの（つまり、作者により authorize された出版物）だったのか、あるいは、出版するつもりがなかったものを、原稿を入手したソープが勝手に出版したもの（unauthorized）だったのか？という大きな論点に関して、あらたに第 3 の可能性を提起した。それは、シェイクスピアの贋作本や海賊版 quarto がすでに何点も出版されていた当時の状況下で、シェイクスピア自身が、意図的に、（シドニーの海賊版ソネット集 *Astrophel and Stella* (1591) をモデルとして、) unauthorized な詩集という体裁で Q を出版するようにソープに原稿を託して出版させた、という可能性である。様々な意味で常識を逸脱する詩集だった Q を出版するために、国王一座の高名な劇作家が自らの意志で出版したとは到底思えないような本の体裁で出版させたのではないだろうか。海賊版、あるいは、贋作？とも疑われる詩集であれば、作者は、出版後、「あれは、海賊版。贋作だよ。」と、笑って世間を煙に巻くこともできる。そして、シェイクスピアは後世の読者がこの詩集の真価に気づき、読み続けてくれることを願ったのではないだろうか。このあらたな観点から、ジャガードが出版した詩集 *The Passionate Pilgrim* (1599) とその増補第 3 版 (1612)、そして、ベンソンが出版した詩集 *Poems: Written by Wil. Shake-speare. Gent.* (1640) の重要性を再考した。とくに、ベンソンが Q を読み、（シェイクスピアの思惑通りに）これを作者の死後出版されるはずだった詩集の海賊版だとみなし、また、この初版本がすべてそのまま作者の作品だとは信じ（られ）ずに、シェイクスピアの作品として後世に遺すにふさわしい詩集に作り直すべく、Q を解体し、改竄したのだとすれば、これは読者を欺くための私欲からではなく、（その緒言にあるとおりに）作者の栄光がこの詩集によってもまた不滅となることを真摯に願ったためだったのではないだろうか。